

Floppy's Phonics Stage 6 'Uncle Max and the Treasure'

p.1

「マックスおじさん、お話しかせて」とピフが言いました。

「おじさん、お話がすごく上手なもの」

「ぼくたち、おじさんのお話が大好きなんだ」

p.2

「寝る前にわしの話がききたいとは、そりゃ本気かね」

「もちろん」

p.3

「そうじゃな」マックスおじさんは言いました。「これはかなり長い話でな。もし話にあきて眠ってしまったとしても……いびきはかくんじゃないぞ！」

p.4

チップはビーン・バッグ*1の上に座りました。ピフは床に寝そべり、キッパーはひじ掛けイスに丸くなりました。

「お茶をいれましょうか」

p.5

マックスおじさんは話し始めました。

「むかしむかし、わしは海の冒険に出かけた……」

pp.6-7

「船の名前はシー・フェリー。乗っていたのはこの4人じゃ。

わし、料理人のマーサ、フィンガーズ・フォスター、それにジンジャー・ジョーンズ」

p.8

「わしらは古い地図と手紙を見つけていたんじゃ。手紙にはターキー島に宝が隠されていると書いてあった」

「こりゃ、おもしろそうだ」

p.9

「わしは地図はほんものだと確信していた。わしらはどうしてもターキー島へ行かずにおれなかった……宝を掘り出すためにな」

p.10

「島に着くまでにはずいぶんかかった。

浜辺まではボートを漕いで行った」

「おまえたちは船をこげ。おれは舵を取る」

p.11

「手紙には、“シェルベイへ行け。スカルロックから10歩進んで……そこを掘れ！”と書いてあった」

「こりゃ、大変だ」

p.12

「わしらは宝の箱を掘り当てた。中には、金貨や純金でできた杯が入っておった」

「宝石もたくさんある」

p.13

『おれたち、金持ちだぜ』ジンジャー・ジョーンズが叫んだ。『すごくぜいたくな暮らしができるぞ』

「全員の分ちゃんとおるわね」

p.14

「ちょうどそのとき嵐が来たんじゃ。風にあおられて、わしの船は岩に打ちつけられた」

p.15

『『なんてこった』ジンジャー・ジョーンズが言った。『シー・フューリーが沈んじまった。船がなきゃ、おれたち島から出られねえぞ。もうどうしようもねえ』』

「助けてくれ！」

p.16

「島にはどのぐらいいたの？」とキッパーがききました。「それにどうやって脱出したの？」

p.17

「島には何週間もいた」マックスおじさんは言いました。「つらかったなあ。食べ物はろくにないし……」

「これ、みんなで食べましょ」

p.18

「ある日、一艘の船が見えた。わしらは火をたいた。その煙を見て、船は方向を変えて、島まで来てくれたんじゃ」

p.19

「だがその船は海賊船じゃった。わしらは宝箱から金貨を何枚か取り出して、残りは隠したんじゃ」

「海賊だ！ 気をつけろ」

p.20

「海賊たちにその金貨を渡して、わしらは島から出ることができたんじゃ」

p.21

「宝のことは海賊には言わなかった」

「秘密はもらすなよ」

p.22

「その4年後、わしは1人で島に戻った。そして宝箱を掘り出した。

だが宝はなかった。箱の中にはフィンガーズ・フォスターからの手紙が入っていた」

p.23

“残念でした！1番乗りはぼくでした！フィンガーズ・フォスターより”

「な、なんじゃと」

p.24

「それ、ほんとうの話？」キッパーが聞きました。「さあて！」マックスおじさんが言いました。

「きみたち、どう思うかな？」

「コノヒト、ウソツイテル」

*¹ビーン・バッグ: お手玉を大きくしたようなクッション。形が自由自在に変わる。